

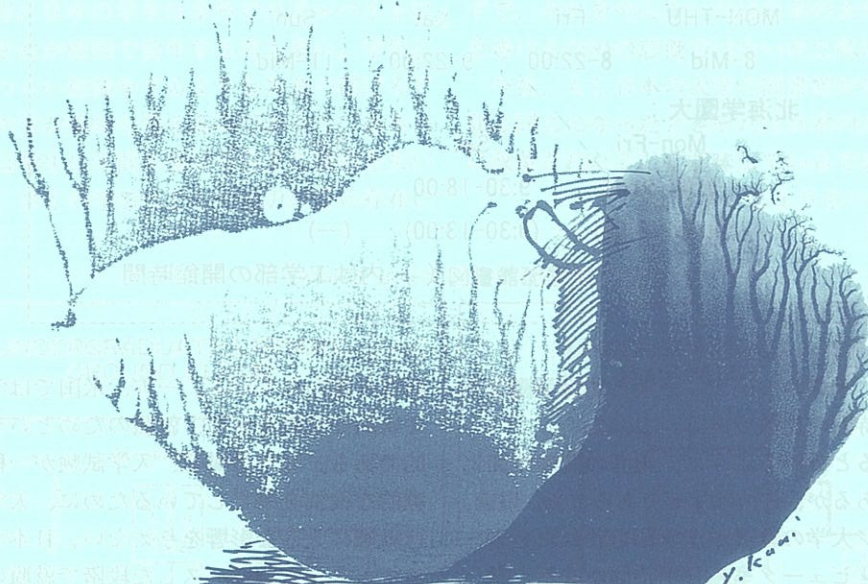
図書館だより

1991.12.5

第13巻 4号

通巻 120号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



十二月

國田 祐作

非遠近法の雪の夜の世界で、
己れの鼓動は星のまたたきのやうだ
(吉田一穂「未生の花」より)

この時期になるときまって登場するテレビの
コマーシャルがある。クリスマスを祝う若い夫
婦、夫は櫛を、妻は金鎖を贈り物にする。ところ
が、妻にはそれぞれくしげずるべき自慢の長い
髪がなく、夫にはそれをつなぐべき親譲りの
金時計がない。貧しい二人は、それぞれの宝物
を金に換えて贈り物を買ったのであった、とい
う寸劇仕立てである。

もちろん、これはO・ヘンリーの短編小説「賢
者の贈り物」からとった筋である。作者は、こ

れはかけがえのない宝物を失った。まことに愚
かしい二人の物語であるけれども、彼らの自己
犠牲はあの賢者の贈り物にまさる宝物だった
のではあるまいか、と話を結んでいる。

東方の三人の賢者は、ベツレヘムに輝く星を
目指し、その星の下に生まれた幼な児のために
贈り物を捧げた。その日を12月25日としたのは
四世紀以後のことであり、古くからの冬至の祝
いにクリスマスを重ねたのであって、元はとい
えば太陽復活のきざしに、酒をくらい馳走をし
合い、大地を踏み鳴らして精霊を呼び起こす農
耕の祭りであった。

私たちもまた、火の前に身を寄せ合い、最も
烈しい吹雪の中で、新しい太陽を待ちわびる習
慣を待っている。全てを消し去る白い闇の世界
が新しい日付を刻むのにふさわしいことをも、
私たちは知っているのである。

(くにた ゆうさく 教養部教授)

図書館開館時間考

当麻 庄司

パーデュー大：

MON-THU	Fri	Sat	Sun
8-Mid	8-22:00	9-22:00	11-Mid

北海学園大：

Mon-Fri	Sat	Sun
9:30-20:00	9:30-18:00	—
(9:30-17:00)	(9:30-13:00)	(—)

() 内は工学部の開館時間

上の表は、米国のパーデュー大と北海学園大の図書館開館時間の比較である。

これを見ると分かるように、両者の開館時間に大きな差があるが、それはなぜであろうか。以前、レスブリッジ大学の教員が工学部を訪れたとき、図書館とコンピュータ室の利用時間が非常に早いのに不思議がっていた。なぜそのように施設をもっと有効に利用しないのか、という外国人の問いに簡単に答えるのは難しい。

もし、日本で米国の大学のように開館時間を長くするとすれば、日本の大学側からの言い分として、おそらく

- (1) 開館しても利用者がいない。
- (2) 開館するだけの職員がいない。

等の声が聞こえてくるであろう。この二つの問題には、単に図書館だけの問題ではなく、日米の大学事情の相違全体、もっとおおげさに言えば日米の社会構造の違いに関わる問題が、象徴的に現れているように思える。

まず(1)の利用者がいないという問題は、日本の学生にとって大学の役割は就職への一段階と捉えられていることに起因する。日本では、大学が学問の場であるというのは2次的に考えられ、大学に行くのはよい就職を得るためのやむを得ない選

択だと思われる。一方、米国では学問の場が1次的な意義をもち、就職のためというのは2次的である。日本の場合、入学試験が一種の資格試験的な役割を果たしているために、大学での成績は就職に大きな影響を与えない。日本の学生にとって、入学試験にパスした段階で就職の範囲は大体決ってしまい、大学が果たす役割はその時点でほとんど終わったことになる。したがって、その後の大学での勉強は、できるだけ少ない仕事量で卒業しようとする。日本の会社も、学生の採用に当たって、大学での成績よりも入学試験でみせた学生の資質の方を重要視する。また、大学で得た知識よりも就職後の教育に重きを置く。終身雇用を前提とする採用では、残念ながらこの方向はおおむね正しいのである。

それでは、日本の大学は学問の場としての役割を諦めざるを得ないのであろうか。幸い、人間性というのは十分に多様であり、中には高校生の時よりも大学に入ってから伸びる晩稲の学生もいる。大学によってそのような学生の占める比率はまちまちであろうが、いかにその数が少なかろうと大学はそのような学生の期待に答える義務がある。そのためには、利用者の数がいかに少なかろうが、やはり図書館の開館時間は長い方がよいのである。利用者がいないから開館する必要がないのではな

学業計画の改善と学業向上

く、利用者を増やす努力をすべきなのである。

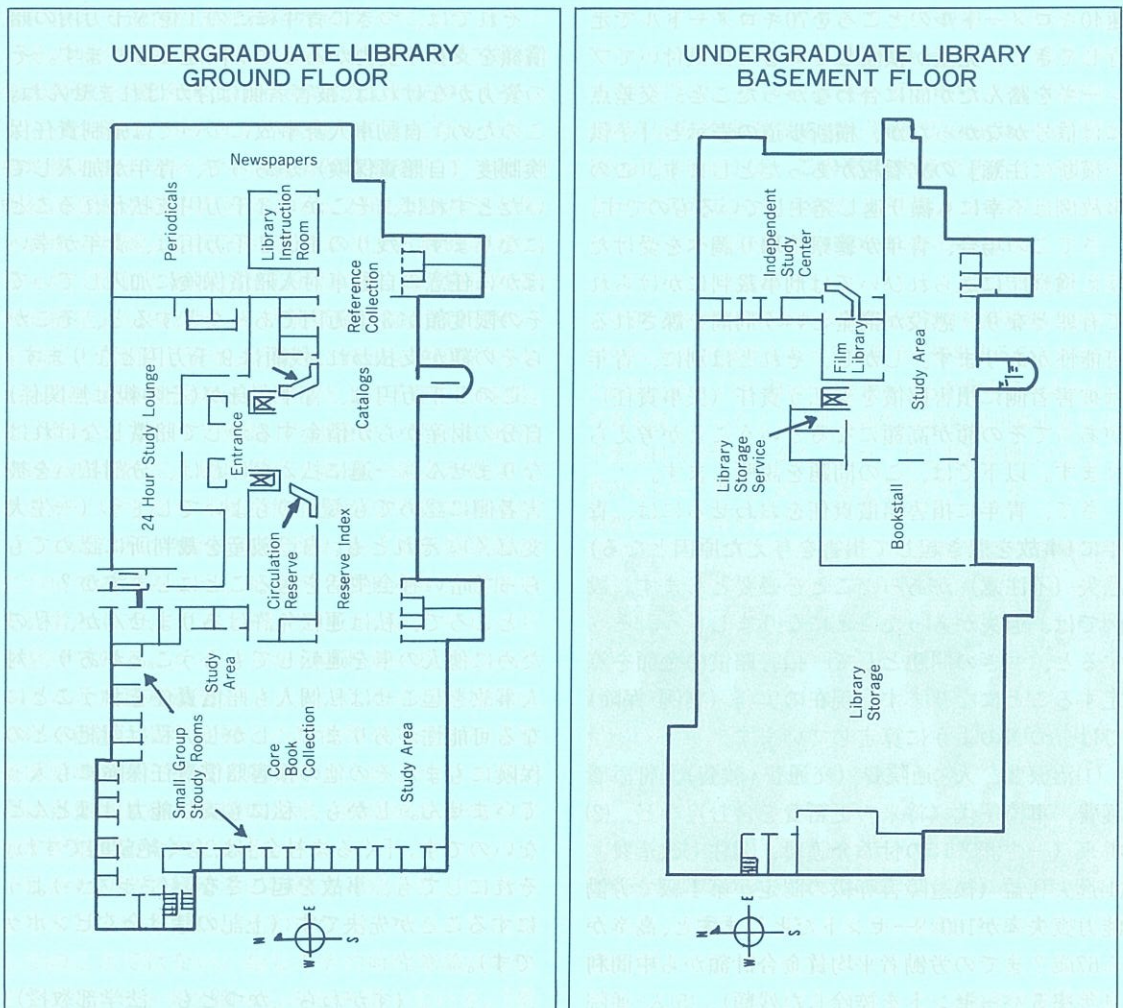
さて、(2)の職員の問題はどうであろうか。米国では、図書館は学生にとってのよい働き場となっていて、それが開館時間を長くすることを可能にしている。米国の大学は、高い授業料を支払っている学生に、少しでもそれを還元するようにしている。一方、日本の学生は学外でのアルバイトに忙しく、それが原因で留年する者も多い。学生にとって、つらい勉強をするよりもお金の稼げるアルバイトの方が興味を覚えるのであろう。あるいは、大学は学生に学問の喜びを教える機能を失いつつあり、多くの学生にとって魅力のない存在に

なっているのかも知れない。いずれにしても、日本の大学は学生に学内で働くことのできる場所をもっと提供するべきであると思う。それは、経済的援助を与えることと施設利用の効率を高めることという二重の意味で学生へのサービス向上につながるであろう。これはその気になればできるはずで、それをやらないのは日本の大学の煩わしさを避けるための怠慢ではないかと私には思える。

今後、もし日本の大学の図書館が米国の開館時間と同じになったときそれは日本の大学が本質的に改革されたことを意味しているであろう。

(とうま しょうじ 工学部教授)

パーデュー大図書館配置図：



自動車事故の損害賠償

菅原 勝 伴

かたくなるしいテーマですが、御要望ですので、お許しねがいます。本学の学生で人身事故を起こす例が跡を絶たないためです。

さて、ある青年が自分の車で児童に重傷を負わせ、治療の結果一命はとりとめたものの、児童は一生車椅子生活を余儀なくされるに至ったとしましょう。事故は、真昼間好天・見通しのよい交差点上で起こったとします。それは、青年が制限時速40キロメートルのところを70キロメートルで走行してきて、児童が横断しているのに気付いてブレーキを踏んだが間に合わなかったこと、交差点には信号がなかったが、横断歩道の表示と「子供の横断に注意」の立看板があったとします。この事故例は不幸にも繰り返し発生しているものです。

さてこの場合、青年が警察の取り調べを受けたうえ検察庁に送られひいては刑事裁判にかけられて有罪となり、懲役か罰金という刑罰を課される可能性があります。しかし、それとは別に、青年は被害者側に損害賠償を支払う責任（民事責任）があってその額が高額になるということが考えられます。以下では、この問題を説明します。

さて、青年に損害賠償責任をおわせるには、青年に（事故を惹き起して損害を与えた原因となる）過失（不注意）があったことを必要とします。設例では、過失があったことになりましょう。そうすると、つぎの問題として、損害賠償の金額を算定することになります。現在の実務（判例・保険）では、つぎのように算定しています。

(1)治療費、入・通院費（交通費・雑費）、付添看護費、車椅子代（将来の更新費を含む）など、(2)将来（一生涯？）の付添介護費、(3)住宅改造費、(4)逸失利益（後遺障害等級の認定が第1級で労働能力喪失率が100パーセントだとしますと、高卒から67歳？までの労働者平均賃金合計額から中間利息年率5パーセントを控除した残額）、(5)入・通院

慰謝料、(6)後遺障害慰謝料などの総額が被害者側の損害（を受けた）額となり、これを仮りに1億5千万円としましょう。

つぎに、この損害額がイコール青年の賠償（すべき）額になるのが原則ですが、もし児童・親の方に事故発生について無視できない落度があったとすれば、その分を損害額から差引く（「過失相殺」）ことになりますが、設例では無理のようです。

それでは、つぎに青年にこの1億5千万円の賠償額を支払う資力があるかが問題となります。その資力がなければ、被害者側は浮かばれませんね。このため、自動車人身事故については強制責任保険制度（自賠責保険）があって、青年が加入していたとすれば、そこから3千万円支払われることとなります。残りの1億2千万円は、青年が幸いほかに任意の自動車対人賠償保険に加入していてその限度額が3千万円であったとすると、そこからその額が支払われ、残額は9千万円となります。

この9千万円は、青年自身が（その親は無関係）自分の財産からか借金するかして賠償しなければなりません。一遍に払えなければ、分割払いを被害者側に認めてもらうのもよいでしょう（一生大変だ！）。それとも、自己破産を裁判所に認めてもらって暗い社会生活を送ることにしますか？

ところで、私は運転免許はありませんが、私のために他人の車を運転してもらうことがあり、対人事故を起こせば私個人も賠償責任をおうことになる可能性があります。しかし、私は前記のどの保険にもまたその他の損害賠償責任保険にも入っていません。しかも、私にも支払能力はほとんどないのです。「くるま社会」は、全く絶望的ですね。それにしても、事故を起こさない（させない）ようにすることが先決です（上記の話は全くピンボケです）。

（すがわら かつとも 法学部教授）

Sir Hicks (1904-1989) を偲んで 一本と人— その3

柴田 義人



*その1は、「Sir Harrodを偲んで」(『図書館だより』第1号昭和54年5月10日)、その2は「Lady Robinsonを偲んで」(同上第9巻第2号・通巻102号1987.7.1)である。

ヒックス卿の訃報を私が読んだのは、一昨年(1989年)5月23日(火)の朝刊であった。早速、この日の講義(札大・経済原論)から、丁度5月のこの頃は例年、徹視的経済分析と巨視的経済分析を研究史的に展望するタイミングだったので、「一般均衡理論および厚生経済理論に対する先駆的貢献」によって1972年、K. J. アローとともに、ノーベル経済学賞を授与された、ヒックス卿の逝去を学生達に伝えて追悼の意を捧げたのだった。

その時の講義メモによると、私はヒックス経済学の特徴を「総合性」(universality)に求めている。ヒックス卿は、ヨーロッパ大陸で生まれ育った「一般均衡理論」とイギリス経済学を総合して、動学的経済分析を試みたのである。27歳の時の処女作『賃金の理論』(1931年)に始まり、古典的名著となった『価値と資本』(1939年)そして『経済の社会的構造』(1942年)と『景気循環論』(1950年)を経て、『価値と資本』『資本と成長』(1967年)とともに、資本理論の三部作目として『資本と時間』が、「新オーストリア理論」の副題がつけられ、1973年に公刊された。他に優れた著書・論文が数多くあるが、いずれも「総合性」豊かな労作である。

ここでは私の専攻分野に係わる『景気循環論』についてみてみよう。ヒックス卿自身が、直接の先行者として、ケインズ、フリッシュ、ハロッドを挙げている。ケインズからは貯蓄=投資のメカニズムと乗数理論を、フリッシュからは物理学における波動と景気変動との類似性を立証した「加速度原理」を、そして周知のように、ハロッドからは自然成長率・均衡成長率・現実成長率のアイデアを継受したのである。

私がヒックス経済学の特徴を「総合性」に求めようとしているのは、そのパフォーマンスに注目してのことではない。むしろその研究意識においてである。ヒックス卿はしみじみ語っている。『景

気循環論』で展開された理論は、「最後の一步を踏みだしたとき、先行したどの理論よりもすぐれて、循環の唯一の理論とみなしうる資格を多少とももつようなものを手にするのである。」(参照、古谷弘訳、1951年。)だがしかし、私には、この「最後の一步」こそ、まさに「両刃の剣」ではないかと思われる。ワルラスのように「総合性」の完成を求めるべきか。ケインズのように未完成の「問題性」を誇るべきか。ヒックス卿は「総合性」のエLEGANSを愛されたのではないだろうか。

ところで、ヒックス卿ご夫妻は本当にエレガントな「おしどり学者」であった。私もケンブリッジ大学に留学中の1966年12月11日、オックスフォード・ジョイント・セミナーに参加した際、シェリー・パーティに姿を見せた、おしどり振りが今も目に浮ぶ。アーシュラ・K・ヒックス(1896-1985)は財政学者であり、The Taxation of War Wealth(1941)は、ご夫妻の共著である。レディ・ヒックスが亡くなられた4年後、ジョン・ロスタス・ヒックスが静かに逝かれたのだった。

(1991.11.18)

昨年、本学経済学会から還暦記念の「経済論集」をいただいた。お礼の意味もあって小冊子を編集することになり、上記註にある「Sir Harrodを偲んで」を飾るにふさわしい写真を探していたところ北大時代の恩師・早川泰正先生(現千葉商科大学学長)から、ハロッドご夫妻を囲んだ記念写真が送られて来た。記して謝意を表すとともに、ここに掲載して、当時を偲びたい。



とき：1975.11.4 ところ：札幌パークホテル「清流の間」

(しばた よしと 経済学部教授)

「北海道・マサチューセッツ州 交流史」に関する 展示資料目録

■展示中

期間：平成3年11月～4年2月
場所：北海学園大学附属図書館1F自由閲覧室
テーマ：「北海道・マサチューセッツ州姉妹提携記念 北・マ交流史展」
(図書館展示きかくNo.15)

■展示資料目録 (要約；フルテキストは展示コーナーで配布中)

1. <History of mutual communication between Massachusetts and Hokkaido>

マサチューセッツ物語 北海道新聞社編 1989
Massachusetts Story. Hokkaido Newspaper. Co.ed.

クラーク その栄光と挫折 ジョン・エム・マキ
北大刊行会 1978

W.S.Clark: A Yankee in Hokkaido. By John M. Maki.

W.S.Clark's Letters from Japan. Ed. by Takashi Kawabata et al. Miyama Press 1987

クラークの手紙—札幌農学校生徒との往復書簡—
佐藤昌彦他編訳 北海道出版企画センター
1986

The correspondence of W.S. Clark and his Japanese students.

Ed.by Masahiko Sato et al.

ホーレス・ケプロン将軍 北海道開拓の父の人間像
メリット・スター 西島照男訳
北海道出版企画センター 1986

Genral Horace Capron. By Merritt Starr.
Illinois State Historical Society 1925

ホーレス・ケプロン自伝 西島照男訳
北海道出版企画センター 1989

The Autobiography of Horace Capron.
Tr.by Teruo Nishijima.

ケプロン日誌 蝦夷と江戸 西島照男訳

Jourral of Horace Capron Expedition to Japan,1871～1875. Hokkaido Newspaper Pub.Co. 1985

2. <History of mutual communication between U.S. and Japan>

我ら見しままに 万延元年遣米使節の旅路 マサオ ミヨシ 平凡社 1984

As We Saw Them: the First Japanese Embassy to the United States. By Masao Miyoshi. 1860 Univ.of Calif.

万延元年のアメリカ報告 宮永孝著 新潮社 1990 新潮選書

1860 American Report. By Takashi Miyanaga. Shincho Ltd.

アメリカ100年の旅—新・米欧回覧実記— 市岡陽一郎 サイマル出版会 1985

A Journey to America -1872 and Today; Retracing Iwakura Mission' U.S. Tour.

By Yoichiro Ichioka. The Simul Press 1985

百年前の日本 セイラム・ピーポディ博物館蔵 モース・コレクション/写真編 小学館 1988

Peabody Museum of Salem E.S. Morse Collection/Photography. Shogakkan, 1st. ed. 1983

モースの見た日本 セイラム・ピーポディ博物館蔵 モース・コレクション/日本民具編 小学館 1988

Peabody Museum of Salem E.S. Morse Collection/Through the Eyes of E.S. Morse. Shogakkan, 1st,ed, 1988

日本その日その日 E. S. モース 平凡社 1970 東洋文庫 171,172,179

Japan—Day by Day. Edward Sylvester Morse. Boston, 1917. (Oriental Collection)

Heibonsha.1970

ニューイングランド歴史の旅 斉藤ひろ子 新潮社 1976 新潮選書

History of New England. Hiroko Saito. Sincho Ltd.

The Pilgrims and Plymouth Colony. Ed.by American Heritage. New York, N.Y., Harper 1961. (Perennial Librery) (以下、略)

気楽に読もう

「ひとり歩きの英語自遊自在」

JTB出版編 1991

今日過熱する海外旅行ブームの中であって、お仕着せのバック旅行に辟易している人も多いと聞く。総じて働きすぎと言われる日本人にとって、時間を忘れて気ままに旅することはこの上ない贅沢かもしれない。そんな人のために本書の必携をお薦めします。先日、某新聞でベストセラーになっていることを知り買い求めた。

私は多くの旅行会話のテキストを知らないが、JTB出版で多少の身虫臭もあると思うが、ジャンル別にカラー分類され、とかく退屈になりがちな語学学習をこのカラー刷は、視覚的にも十分楽しむことができる。

毎日の通勤、通学の折、ウォークマンも良いがこの一冊もバッグの隅に忍ばせて語学力を身に付けたいものである。

「弱いから、好き。」

長沼 節 文化出版局 1989

ファッションあるいは広告の世界は過激である。それは季節を問わず、日々人々に消費され慣らされ加速度的に陳腐化してゆく。それではその過酷なサイクルの末に明確な目標があるのかといえば非常に疑わしい。そういった世界が、今日を否定することによって明日のなにものかを創造あるいは捏造しようとする性格がある限り、明日のさらに向こうにはっきりと目指すべきものなどありえないわけだ。とはいえ、今日もメディアに広告は溢れ、どこかでファッションショウが行なわれている。その不毛なまでに過激でミステリアスな世界に数多くのデザイナー、アーティストを送り出した人がいる。「セツ・モードセミナー」主宰の長沼節氏である。研ぎ澄まされた感性を持ち、飄々として、ちょっと（いや、完全にかな）ホモっぽくて、言うことなすこと感覚的でカッ飛んでいてなおかつ暖かい。自分の作品に対して「私がただ自由に遊んだ残りカス」と言い、その「実用価値」を否定する氏の感覚なんて最高だと思いませんか。

死体は語る

上野正彦著 時事通信社

「死人に口無し」と言いますが、実は死体はもの言わずして語るのです。法医学をつかさどる監察医は、生きている人間にたずさわる臨床医と異なり、死体と対話し死者の人権を擁護したり、公衆衛生の向上や予防医学に貢献しているのです。

一見自殺と思われた死体も、検死、行政または司法解剖をすることによって他殺であることを発見するなど、事件の真相を究明してしまうのです。法医学というと、堅苦しい感じがしますが、過労死・安楽死など現代のトピックス的な問題や、ミステリアスな事件を通して、医学・医療の在り方、ひいては人間の在り方を問いかける一冊です。

京都の旅 第1・2集

松本清張・樋口清之 光文社文庫

意外にみじめな宮廷生活、焼けてみてわかった金ピカの正体、昔も今もデートの名所、現代経営学も顔負け。これは観光地として内外ともに有名な京都のある場所を指しているのですがどこだか分かりますか？

正解は順に御所・金閣・嵐山・大徳寺です。

こんな見出しで第1集40ヶ所、第2集30ヶ所のエピソードが綴られており、目次をみただけで興味が湧いてきます。これは市販されている旅行ガイドブックがどれをとってみてもコースの手引き書で終わっていることに物足りなさを感じ、それでは自分で書けばいいといった動機から生まれた本です。

歴史に対する洞察力にすぐれた著書ではあるが、さらに新しい見方や解釈をと考え、単なる案内にとどまらず、考古学・歴史学・民族学・地理学加えて文学・美術といったものを立体的にふまえるように心が配られています。

又、現地をみる人の目になって、自分の感動を人に伝え、いっしょに見ていたい旅人の仲間意識から書かれてもいますが、勿論、実際に京都に向向かなくても、紀行読物として十分に楽しめる本です。

◆経済関係◆

- 日経を読むための経済学の基礎知識 岩田規久男著 1990
 マンチェスター派経済思想史研究 熊谷次郎著 1991
 マクロ経済政策の研究 稲毛 満春著 1991
 アメリカ経営史学の研究 榎本 悟著 1990
 日本企業のダイナミズム 宇沢 弘文編 1991
 企業戦略論 森田 道也著 1991
 情報文化企業論 吉田 勇著 1990
 仕事と人間性 F. ハーズバーグ著 1968
 バンガードマネジメント ジェームズ・オトゥール著 1986
 ビジネスマナーbook 住友信託銀行 1991
 現代経営管理論 高柳 暁編著 1991
 オフィス・ペーパーワーク 松平 栄利子著 1991
 企業と組織の経済学 宮本 光晴著 1991
 海外進出企業の財務と会計 中島 省吾編著 1985
 南インド社会経済史研究 柳沢 悠著 1991
 社会サービスの経済学 大野 吉輝著 1991
 日本企業の国際化と労使関係 重里 俊行著 1991
 ナショナル・トラスト ロビン・フェデン著 1984
 通産省とハイテク産業 ダニエル・I. 沖本著 1991
 集客力の研究 藤田 公道著 1991
 コンセプト・メーカー私の方法 坂井 直樹編著 1991
 イノベーション普及学 E. M. ロジャーズ著 1990
 日本の取引慣行 三輪 芳郎著 1991
 流通業は四社だけしか生き残れない 吉田 貞雄著 1991
 バブルの物語 ジョン・K. ガルブレイス著 1991
 スーパー301条強まる「一方主義」の検証
 ジャグディッシュ・バグワティ編著 1991
 体系財務諸表論 興津 裕康著 1991
 会計原理 吉田 寛著 1991
 急成長のCNN ハンク・ホイットモア著 1991
 現代の企業理論 万仲 脩一著 1990
 アメリカ企業の史的展開 丸山 恵也 1990

◆法律関係◆

- 現代民主主義と歴史意識
 京都大学政治思想研究会編 1991
 憲法政治の転換 小林 直樹著 1990
 アメリカ現代政治の分析 阿部 斉編 1991
 政治資金 日本財政法学会編 1991
 米ソの中東政策と日本の課題 総合研究開発機構 1990
 国家への関心と人間への関心 広中 俊雄著 1991
 現代法を学ぶ 天野 和夫編 1991
 法学方法論 K. ラーレンツ著 1991
 西洋中世法の理念と現実 世良 晃志朗著 1991
 アメリカ法辞典 S. H. ジフィス著 1991
 ドイツ法入門 村上 淳一著 1991
 人権要論 鴨野 幸雄編著 1991
 世界の憲法・日本の憲法 中嶋 一磨〔編〕 1990
 憲法学基本論 土居 靖美編著 1991
 論点憲法教室 中村 睦男著 1990
 法の支配と行政法 続 杉村 敏正著 1991
 現代型訴訟と行政裁量 高橋 滋著 1990
 はじめての民法 中川 淳著 1991
 四宮和夫民法論集 1990
 時効 長戸路 政行著 1991
 現代不法行為法学の展開 加藤 雅信著 1991
 商法講義案 石山卓磨著 1991
 現代企業法 荒木正孝著 1991
 商法講義 桜井一成著 1991
 最新商業登記読本
 法務省民事局第四課職員編 7訂版 1991
 刑法演習講座 前田雅英著 1991
 現代刑法体系の基本問題
 ベルント・シューネマン原著編 1990
 民事訴訟法論集 山木 戸克己著 1990
 ドイツ民事訴訟法の新展開 吉野 正三郎編著 1991
 西ドイツ民事訴訟法の現在 吉野 正三郎著 1990

案内

◆工学関係◆

- シュタイナー哲学入門 高橋 巖著 1991
- 連邦結成 木村 和男著 1991
- グローバル・マネジメント 伊丹 敬之著 1991
- 情報のなわ張り理論 神尾 昭雄著 1990
- Prologへの入門 I.Bratrok著 1990
- C言語と割込み 磯部 俊夫著 1990
- 日本語の情報化 横井 俊夫著 1990
- 古代の祭式と思想 中西 進編 1991
- スペイン建築の特質 G. F. チュエッカ著 1991
- 工科のための入門数値解析 柳原 弘毅著 1990
- ファジィ集合 K. J. シュマッカー著 1990
- コンピュータシミュレーション 上田 顕著 1990
- 固体電子工学 佐々木 昭夫著 1983
- GP-IBプログラミング入門 亜樹 智耶著 1990
- 簡易ロボットの設計と製作 秋山 勇治著 1989
- デジタル位置決めサーボ機構と駆動回路の設計
加藤 一著 1990
- ロボット工学ハンドブック 日本ロボット学会編 1990
- デジタル制御システム Charles L. Phillips著
制御工学の基礎 柴田 浩著 1990
- C言語とMODEM 植田 一廣著 1989
- メカトロニクスへの招待 丹野 頼元編 1989
- メカトロ技術基礎用語辞典 武藤 一夫著 1990
- メカトロニクス概論 藤野 義一編著 1990
- 電子デバイス工学 古川 静二郎著 1990
- ISDN時代の光ファイバ技術 大久保 勝彦著 1989
- 電子機械応用 メカトロニクス研究会編 1990
- 知的CIA システム E.Wenger著 1990
- エキスパートシステム構築技法入門 森 文彦著 1990
- ニューラルネットワーク 今井 兼範著 1990
- コンピュータビジョン 谷内田 正彦著 1990

◆教養関係◆

- 図解発想法 西岡 文彦著 1991
- ロールシャッハ・テスト 小野 和雄著 1991
- 〈まち〉のアイデア ジョーゼフ・リクワート〔著〕 1991
- 世論調査と政党支持 松本 正生著 1991
- 国際システムにおける法と力
ゲ・イ・トゥンキン〔著〕 1990
- 住むための都市 ジョナサン・ラバン著 1991
- アクセス論 フランシス・J. ベリガン編 1991
- 家成立史の研究 服藤 早苗著 1991
- 困った時のエレクトロニクス 太田 茂著 1991
- 試験の時代の終焉 矢野 真和著 1991
- 子供の民族学 飯島 吉晴著 1991
- 非常民の性民俗 赤松 啓介著 1991
- ソ連軍対ゴルバチョフ 丸山 浩行著 1991
- N. A. P. 近代ヨーガ 橋本 貫光著 1991
- 工学基礎数学1. 2 実践教育研究会編 1991
- テクノポリテックス 内田 盛也著 1991
- アウトバーン Kirrschbaum Verlag著 1991
- アドボケイトプランニング
日本環境プランナーズ会議 (NEPA) 編 1991
- 地球にやさしいソーラーカー 藤中 正治著 1991
- パソコン使用法のABC 今枝 彬郎著 1991
- ノートブックパソコン戦争 長沢 光男著 1991
- AIテクノロジー Alan Bundy編 1991
- ジャズ・イズ ナット・ヘントフ著 1991
- 実例で学ぶパソコングラフィックス 小畑 秀之著 1991
- 日本ロック・バンド大辞典 宝島編集部編 1991
- コルトレーンの世界 植草 甚一編 1991
- 読みやすい大きい活字の実用国語新辞典
新星出版社 1991
- 英語の人間関係学 上地 安貞著 1991
- ハローの後の3分間英会話
ルース・ファン著 1991
- おまかせください! はじめての電話英会話
巽 一朗著 1991

夢風人 ④

— ロシア大使
ガリツィン(1720-92)
のみたモーツァルト —

名曲は降る雪のごとく
—1784年2月9日 ウィーンの夜—

私は今でも忘れない、モーツァルトが彼の自作品目録の最初の一桁に『ピアノ協奏曲 K449』を記入したのを私に見せてくれた時のことを。

それは左手に「日付、曲目、調性」そして「楽器編成」が記入され、右手にはその出たての小節が記入されていた。

日付は1784年2月9日となっていた。この曲はやがて我が家の「モーツァルト演奏会」で弾かれることになったが、我々はまるで「夢」をみているようだった。

それは「管」と「弦」と「鍵」の見事な調和であった。

今日大部分のオーケストラは100人の規模になっているようだが、モーツァルトの編成は

ヴァイオリン 2本

ヴィオラ 1本

コントバス 1本

ところがわずか弦4本に対して管楽器は

フルート 1本

オーボエ 2本

ファゴット 2本

ホルン 2本

クラリネット 2本

ティンパニー 1本

の10本で合計14本。これにピアノが加わって15人編成だった。

「管」のことを英語でWindというが、まさしくモーツァルトは「夢」を運んだ“風”ではなかったか。その後、モーツァルトは一連の「ピアノ協奏曲」を冬に作曲しつづけたのだった。

私達は冬になると「天使から来た雪手紙」を読んでいたわけである。

モーツァルト

楽
天
花

時
芽
季
の
モ
ー
ツ
ァ
ル
ト
④

北千花
ペチカ

「春への憧れ
K596」

—とわに夢みた
小川のほとり

1791年初頭、1月5日、モーツァルトは「別れの歌」ともいうべき「ピアノ協奏曲 K595(27番)」を作曲した。モーツァルトがこの世を去ったのは1791年12月5日である。彼が生まれたのは1756年1月28日。

彼こそは「雪の申し子」であった。『春への憧れ K596』は1月5日から10日余りたった14日に『春のはじめに K597』『子供の遊び K598』と共に作曲された。

死期の近いことを悟ったのだろうか。モーツァルトの心の中にあの澄みきったアルプスのふもとの情景が目につく。降りしきる雪の夜、母があみ物をしている。そばではいろいろの火がはげしくもえ、モーツァルトはまだろんでいる。「あの小川のほとりにまたすみれが咲くんだ」と、モーツァルトは思う。昼間の「そりすべり」があまりにも激しかったので疲れていたのだった。

やがて母がモーツァルトを起こしてくれた。「風邪をひくよ。早く寝なさい。明日は早くから、フィナルムジークの練習の日でしょう」

モーツァルトが思い浮かべたのはまぎれもなく、あのロマンティック街道の冬の日々母にあまりにも負担をかけすぎたことだった。

「もっと母と暮らしたかった」とモーツァルトは涙ぐむ。降りしきる雪がモーツァルトの目から離れなかった。モーツァルトがとわにあこがれたのは「母」だったかもしれない。

雪のち幾千彩

音を彫った人々

—モーツァルト
知恵の泉にそいて

啓芽季の
モーツァルト

楽
天
知

④

「ところで」とピュタゴラスは言った。

「バビロニアの数学者たちはどうだったかね」。

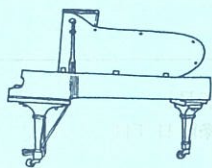
「ユウフラテスの知恵は悠久の流れの中にありますよ。それより何よりも僕はあのバビロニアの人たちが、オーボエを持ち、リラを手にとってそれを自由に操っていたことでした。彼らは立派な楽譜を粘土板に彫っていたんですからね」。

モーツァルトはさらに続けて「その音色はあたかも甘い蜂蜜や甘いぶどう酒を飲みほすごとくでしたよ」と。

これを聴いたピュタゴラスは満足そうに、「そうとも、彼らこそは真の知恵の泉とよべるね。音楽は数学に通じているんだ。ひょっとしたら『彼らは音楽の中にピュタゴラスの定理』を導入していたのではないかね」。

「ピュタゴラスさん、あなたはそれを照明してみせましたね。音楽が数学の法則にのっとっていることを」とモーツァルトは言った。

「ともあれ元気で戻って何よりだった。さあさあ、ここに取り立てのぶどう酒がある。仲間たちのところへ行って、君の映し取ったバビロニアのメロディーを演奏してもらおうじゃないか」。



—モーツァルト
忘れ得ぬ
人々より

アマデウス
交遊録

④

たぐいまれな友情

—もう一人のパパ・ハイドン—

モーツァルトがもし彼の生涯の中で真の友を一人あげよときかれたら、ためらいもなく「ハイドン(兄)」の名をあげたことだろう。

ウィーン時代のモーツァルトはバリ風の「ギャラント」な様式に加えて、ハイドン風の「楽理様式」を習得したとされる。

モーツァルトのような神童とさわがれた幼年時代はハイドンとは無縁であった。家は貧しく、少年合唱団員の一人として歌をうたわねばならなかった。彼の信条は「生活第一、音楽第二」とでもいべき手堅さであった。

ボヘミアの領主が没落し、やがてハンガリーの田園でハイドンはエステルハージ宮廷の楽団の楽長としてその生涯のほとんどをすごした。

100曲以上の「交響曲」70曲以内の「弦楽四重奏曲」がハイドンを何よりも「ウィーン古典派」音楽の一人としてきわだたせてはいるが「ピアノ三重奏曲」を41曲も作曲したのは特筆すべきことだろう。

モーツァルトも「ピアノの国・ウィーン」でさっそく、この「ピアノ三重奏曲」を手がけ合計7曲作曲しているが、ハイドンの数ではなかった。

モーツァルトの死を異郷の地ロンドンで聴いたハイドンはその晩年をめぐまれた条件の中ですごしたのである。

モーツァルトよりも14歳年上でありながら、ハイドンが没したのは1809年。モーツァルトよりも18年も長く生きた。

もしモーツァルトにハイドンのような忍従が半分もあれば、さらに幾千彩の音楽を我々は得たであろうにとくやまれる。

省エネ考(その四)

小坂直人

我国の最終エネルギー消費に占める部門構成比を見ると次のようになっている(1987年時点)。

産業部門 53.1パーセント

民生部門 24.6パーセント

運輸部門 22.3パーセント

つまり、我国では、エネルギー消費の半分以上は産業部門で行なわれており、民生部門の中でも家庭用部門は半分に過ぎないから、残りの事務所やビル関係の業務用消費分及び運輸部門の営業用部分を含めると、広い意味での産業活動において消費されるエネルギーは全体の圧倒的部分を占めていることが分る。各家庭でささやかな「省エネ」努力をしても、産業部門の動向如何によっては、それが全く生かされないということがありうるのである。しかも、エネルギー消費の産業部門偏重は我国特有の現象であり、ヨーロッパ先進諸国では産業部門の比重は概ね30%台であり、民生部門よりも小さい。

しかしながら、我国の産業が「省エネ」に対して努力を怠ってきたということではない。産業部門はそれ自身として「省エネ」を実行しなければならない事情をかかえていたからである。1973年の第一次石油危機の時のように、石油価格が一気に4倍になるという状況は、いかにそれまでの石油が安価であったにしても、石油多消費型の産業にエネルギーコスト上の決定的ダメージとなるものであった。それ故、1970年代後半以降、「省エネ」、「省石油」が産業界においてこそ至上命令とされたのである。

たとえば、産業部門の中でも最大のエネルギー消費産業である鉄鋼業について見ると、この「省エネ」努力の過程がよく現れている。二度の石油危機ををはさんだ前後を比較すると、粗鋼1トンあたりのエネルギー消費原単位はほぼ20%低下し、それだけ「省エネ」に成功したことになる。しか

も、この「省エネ」は粗鋼1トンあたり45kgの重油を消費(1975年)していたのが、0.3kg(1985年)まで低下するという、徹底した「脱石油」によって達成された。もちろん、この「脱石油」は、他方でコークス比の上昇=石炭使用の増大という代償を払っての結果であって、単純に「脱石油=省エネ」とはいえないが。

このように、少なくとも1980年代の半ばまでは、鉄鋼業における「省エネ」は大きく前進してきたといえるのであるが、1987年以降、つまり、今年まで続いた史上最長といわれる好景気の中で、この「省エネ」も停滞ないし後退ともいえる状況に陥っている。この背景には、石油を中心としたエネルギー市場の動向もさることながら、鉄鋼業において電気メッキ鋼板など製品の高級化が進み、これが鉄鋼業全体のエネルギー消費を増大させているということがある。しかし、この傾向を安易に認めるような社会情勢にないことは、近年の「地球環境問題」に対する鉄鋼業の社会的責任の大きさからいって明らかである。このため、鉄鋼業は従来から行なわれてきた排エネルギー利用に加え、直流電気炉の採用、発電機のガス・タービン・コンバインド化を進めると共に、余った排熱や電気を工場周辺の産業及び民生用需要へ供給することなどによって、上述の課題に 대응しようとしているようである。

我々は、ここでもまた、エネルギーの供給システムを一つの工場や産業部門内の孤立したシステムとしてではなく、産業と民生をトータルに結合したシステムとして再構築するという課題にぶつかることになる。「省エネ」は個人的な個別的テーマである以上に社会的テーマであると言ふべきなのかもしれない。

(こさか なおと 経済学部教授)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.14 No.4.(通巻120号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部分室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)841-1161 本館内線 270~275・279 工学部内線 813・814